

万葉集における有情とその存在の表現：「みる」 「をる」を中心として

瀬良, 益夫
金光学園高等学校教諭

<https://doi.org/10.15017/12359>

出版情報：語文研究. 6/7, pp.74-82, 1957-12-30. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

万葉集における有情とその存在の表現

—「ある」「をり」を中心として—

瀬 良 益 夫

ものの存在を表現する言葉はいろいろあるにしても、その中で「ある」と「をり」とは特に有情の存在を表はす語といはれる。有情とは、人間や鳥獣のやうに生命或は感情をもち、草木土石の如き非情に対立するものであるが、「ある」「をり」はかうした有情の存在を意味する言葉として一般に認められ、これが今日の定説となつてゐる。

ところで万葉集における用例を調べてみると、人間や鳥類の存在を意味する例は確かに多いが、しかし中には雲・霞・船などの存在を示す用例も見られる。これらは現代の我々からすると、生命のない非情であつて、かうした非情の存在にも「ある」「をり」が使用されたといふことにならる。この事實は従来の定説に反するわけで、これをどう説明するかが問題となるのである。

そこで問題の用例をあげると、第一に雲を「ある」といふ場合がある。例へば、「春日山朝立つ雲の居ぬ日なく見まくのほしき君にあるかも」(五八四)「巻向の檜原も未だ雲居ねば子松が梢ゆ沫雪流る」(二三二四)「さきなみの連庫山に雲居れば雨ぞ降るちふ帰り来わがせ」(一一七〇)などでは、「雲ある」といふ表現が見られるが、これは雲の存在をいつたものである。この表現を万葉総索引によつて調べてみると、全部で一二例ある。ところでこれに関係のある語としてあげるべきものに「雲ぬ」といふことばがあり、総索引によれば二三例見出される。「雲ぬ」は「ある」の連用形に雲が加はつて合成名詞となつたものであるが、これはすでに記紀歌謡にも現はれてをり、「吾家の方よ雲ぬ立ち来も」(記景行卷)とある。宣長は「くも

ゐとは、常には雲の居る処を云へども、古は又直に雲に云へること多し」と説明してゐる。思ふに「雲ゐ」は元來雲がゐる意で、それが雲のゐる所即ち空にもなれば、又雲そのものをさすやうにもなつたのであらう。「ま遠くの雲ゐに見ゆる妹が家」(三四四一)「眉のごと雲ゐに見ゆる阿波の山」(九九八)などは空を、「三笠の山に朝さらず雲ゐたなびき」(三七二)「香具山に雲ゐたなびき」(二四四九)等は雲そのものを意味すると思はれる。

次に雲と同じ天然現象である霞についても「ゐる」といふ場合があり、東歌に「霞ゐる富士の山びに我が来なばいづち向きてか妹がなげかむ」(三三五七)「筑波嶺の嶺ろに霞ゐ過ぎがてに息づく君を率寝てやらさね」(三三八八)とある。これらの「霞ゐる」は諸註が等しく認めてをるやうに霞がゐるの意で、つまり霞の存在してをることを「ゐる」といつたものである。以上雲や霞に関する用例をあげたが、これが全部で四〇近くもあることから考へると、雲や霞の存在を「ゐる」といふのは一般的な表現であつたといつてよい。しかも記紀歌謡や東歌などにも用例の見えてゐる点からして、これは極めて古い原始的な表現と見られる。

雲や霞の他に、船を「ゐる」「をり」といふこともあつた。例へど、「みさごゐる渚にゐる舟のこぎ出なばうら恋

ひしけむ後は逢ひぬとも」(三二〇三)「みさごゐる渚にゐる船の夕潮を待つらむよりは我こそまされ」(二八三一)とあり、又東歌には「埼玉の津にゐる船の風をいたみ綱は絶ゆとも言な絶えそね」(三三八〇)と見えてゐる。この場合、「渚にゐる船」「津にゐる船」は、渚や港に止まりそこに存在する船を意味するわけで、要するに船の存在を「ゐる」「をり」といつた例である。

三

万葉集で「ゐる」「をり」が雲・霞・船の存在表現に使用されることは以上によつて明らかであるが、ではこの他に万葉の「ゐる」「をり」がどのやうに用ひられているかについて考へてみたい。先づ万葉総索引によつて「ゐる」「をり」の用例総数を調べてみると、両者いづれも一四〇例近くに達する。この中「をり」はすべて動詞の用法であるが、「ゐる」の方では動詞一一四の他に、「雲ゐ」二三、「家ゐ」一の如く、他の語に結び付いて合成名詞となつたものが加はつてをる。なほついでに記紀歌謡の用例に關して一言すると、記紀のいづれにも「ゐる」「をり」が各数例見られる。本文になると、居・処などの文字があつて、「ゐる」「をり」とよむことができるが、確実な例は

少いやうである。

さて上述したやうな多数の「ゐる」「をり」が、どういふ風に使用されているかを考へてみたいが、先づ動詞としての用法から見ると二つの種類がある。一つは「みさごゐる荒磯」(三六三)「さもらふと吾がをる時に」(四三九八)の如く、「ゐる」「をり」を単独で使用して対象の存在を表はす場合である。今一つは、「二人並びる語らひし」(七九四)「水に浮きゐて」(五〇)といひ、或は「息づきをらむ」(一五二〇)「今か今かと待ちをるに」(二八六四)といふやうに、他の動詞に接続して用ひる場合である。佐々木博士の万葉事典は、「待ちをり」「息づきをり」などの用法を、動詞に接続して動作の存在継続を表はす補助動詞としてゐるが、これをさう見るならば、「浮きゐる」「並びゐる」の場合も同様に解すべきであらう。いづれにしてもかうした補助動詞的な用例が万葉に多く、例へば「ゐる」一一四例中その五割強は動詞に接続してをり、又「をり」も一三九例中五〇例近くが同じ補助動詞的な用法をもつてゐる。これは万葉だけでなく、記紀歌謡にも見られる現象で、古くから発達してゐたものやうである。

次に「ゐる」「をり」がどのやうな対象に使用されたか、その主語となつてゐるものを調べてみると、最も多い

のは人間に関する用例である。即ち「ゐる」一一四例の中、人間を主語とするものが約七割、「をり」に至つてはその大部分が同じ用法だといつてよい。次には鳥類を主語とするものがあり、「ゐる」では三〇例ばかり、「をり」は三例がこれに属する。なほ獣類についての用例は万葉にはなく、記紀歌謡でも鳥獸の中現はれてゐるのは鳥類だけである。以上あげた人間や鳥に関するものの上に、最初かかげた雲・霞・船についての用例を加へると、これで万葉における「ゐる」「をり」がつくされるわけである。かくて、「ゐる」「をり」の主語は、人間・鳥・雲・霞・船に限られるといつてよい。こゝ結論は、「ゐる」「をり」を単独で使用してもものの存在を表はす場合は固より、他の動詞の後につけて動作の存在継続を示す補助動詞の場合にもあてはまるのであつて、主語の面からすれば両者の間に差異はない。ところで現代国語の「ゐる」「をる」にも、「人がゐる」「鳥がをる」のやうな存在を表はす動詞の場合と、「石が落ちてゐる」「木が倒れてをる」といふやうに「て」を伴つて動詞に連り、動作の継続進行を示す補助動詞としての作用をもつ場合との二種がある。しかしこの兩者の間には主語の相違があるのであつて、前者が有情のみを主語とするに反し、後者は有情非情のいづれをも主語とし得る自由な用法をもつてゐる。されば両者は語源的には

同一であつても、主語の面からすれば大きなずれがあり、分化の度合が甚しいといへよう。これに対し、万葉の方はいづれも主語は同一で、両者の間に相違はないわけである。

要するに、万葉における「ある」「をり」の主語は、人間・雲・霞・船に限られてゐるといふことになるが、次のやうな特殊な例もあるので、一応の説明を加へておきたい。例へば巻七に、「吾妹子に吾が恋ひ行けばともしくも並びをるかも妹とせの山」(一一一〇)とあり、山について「をり」といつてゐる。しかしこれは紀伊国の妹山背山を歌つたもので、その妹背といふ名称にもとづく擬人的表現といつてよい。この歌の前にも、「人ならば母のまな子ぞあさもよし紀の川の辺の妹とせの山」(一一〇九)と見え、擬人化のあとをうかがうことができる。又古事記仁徳巻には、「八田の一本菅はひとりをりとも大君しよしと聞こさばひとりをりとも」といひ、菅の存在を「をり」と歌つてゐるが、これは八田若郎女を菅に託して詠んだ譬喩的表現だからである。さらに万葉卷三の長田王水鳥歌には、「聞きしごとまこと貴く奇しくも神さびをるかこれの水鳥」(二四五)とあり、鳥を主語として「をり」といつてゐる。しかしこの場合、水鳥は書紀にも記してあるやうに古くから神秘的な鳥と見られたらしく、長田王もこれを単

なる自然ではなく、或神的なものと考へて「をり」と表現したのであらう。

四

先に「ある」「をり」の主語がどのやうなものであるかを検討したが、この中間や鳥は有情であるから従来の定義にあふとしても、・雲霞・船の場合は問題であると思ふ。凡そ我々は生物学的な常識に立つて、生命或は感情をもつものを有情とし、それ以外を非情とするが、この見地からすれば雲・霞・船の如きは明らかに非情である。従つて雲・霞・船の存在を「ある」「をり」といふ万葉の用例は、従来「ある」「をり」は有情の存在を示すといふ定説に反するわけで、この点をどう説明するかが問題となるのである。

この問題に入る前に先づ明らかにしておきたいのは、雲や船が「ある」「をり」といふ場合、その存在のし方は具體的にいつてどのやうなものであるかといふ点である。これについて諸註の説をまとめてみると、動くべきものが動かず一所に静止定着してゐるあり方といふことになる。例へば「滝の上の三船の山にゐる雲」(二四三)について、山田博士は「ある」は「立つ」に対する語にて、雲のその

所に止まりてあるをいふと説いてをられる。即ち常ならば去来し移動する雲や霞が、動かす一所に定着してゐる状態、これが「ゐる」の本義である。「筑波嶺の嶺ろに霞の過ぎがてに息づく君を率寝てやらさね」(三三八八)といふ東歌では、筑波山に霞のゐることが序となり、本意の過ぎ難く息づく人を導くわけであるが、過ぎ行くべき霞の動かす止まつてゐる状態が「ゐる」であるから、「過ぎ難に」の序となり得るのである。

同じことは船の場合にもいへるのであつて、「みさごゐる渚にゐる船の夕潮を待つらむよりは我こそまされ」(二八三一)「みさごゐる渚にゐる舟の漕ぎ出なばうら恋ひしけむ後は逢ひぬとも」(三二〇三)等では、船を「ゐる」といつてをるが、これも静止定着の意であるといはれる。

即ち諸註はこの場合、和名抄船事類の「説文云、艘、子紅友、俗云為流、船著沙不行也」といふ註を引いて擱坐の意とする。即ち動くべき船が動かす沙中に擱坐固定してゐる状態で、従つて「渚にゐる船の夕潮を待つ」といふやうに潮を待ちあぐむわけである。又「埼玉の津にをる船の風をいたみ綱は絶ゆとも言な絶えそね」(三三八〇)といふ東歌において、「津にをる船」は擱坐といふほどではないにしても、港に固くつなぎ止めた船をさしてをり、そこにはやはり静止定着の意味があると思ふ。

以上によつて、雲や船が「ゐる」「をり」といふ場合、その「ゐる」「をり」は動くべきものが動きを中断して、静止定着してをる状態をさすことが明らかになつた。これは鳥の場合にもいへることで、例へば「山の際に渡る秋沙の往きてゐむその河の瀬」(一一二二)「ほととぎすあふちの枝に往きてゐば」(三九一三)などにおいて、「往きて」は鳥の飛び去る動きを意味するに對し、「ゐる」は河の瀬や木の枝に下りて止まることをいふわけである。だから「安倍の田の面にゐる鶴」(三五二二)「萩の古枝に春待つとをりし鶯」(一四三一)等でも、鶴や鶯は飛び廻つてゐるのではなく、田の面或は枝に止まつてをると見なければならぬ。

最後に人間の場合にも以上と同様の事実がうかがはれる。万葉集を見ると、「立ちてもゐても我が念へる君」(五六八)「立ちて居て見れどもあやし」(四〇〇三)「立てれども居れども共にたはぶれ」(九〇四)などの如く、「立つ」に對立する語として「ゐる」「をり」を使用した例が多い。この両者が反對の關係にあることは既に諸註も指摘してをり、雲の場合でも「立つ雲」に對して「ゐる雲」のあることは上述したところである。「立つ」は立ち上る動きをいひ、「ゐる」「をり」は逆に静止固定の状態を意味する。人間の場合「ゐる」「をり」は「立つ」に

対して坐す或はすはるの意であるが、坐すといふことにはやはり動きと逆の静止固定の意味があると思ふ。万葉では「ゐる」「をり」の表記に居・座・坐・集などの漢字をあててをるが（「ゐる」の漢字表記は居・座・坐・集、「をり」の方は居・座）、この両者に座・坐の文字が使用されてをることは注目に価する。つまり「ゐる」「をり」には坐す或はすはるといふ意味があるわけで、座・坐の文字は意味に即した表記なのである。かくて人間の場合「ゐる」「をり」は立ち上る動作と逆のすはることをいふわけであるが、そこにはやはり静止定着の意味があるといつてよい。

五

人間・鳥・雲・霞・船のそれぞれについて、これらが「ゐる」「をり」といはれる場合、それは具体的にどのやうなあり方を意味するかを分析したが、以上を通じていへることは、動くべきものが動きを中断して静止定着してをる状態といふ点である。ここで先づ注目されるのは、人間から船に至るものがすべて動くことのできる対象として捉へられてゐる点である。これらはいづれも去来し移動することの可能な点で共通してゐる。尤も、動くことのできる

ものの中にも今日から見れば二通りあつて、一つは人間や鳥獸の如く生命をもつて自ら動くものと、雲・霞・船のやうに他の力によつて動くものとに分けられる。生物学的なもの考へ方に立つ我々は、前者を有情とし、後者を非情と見る。しかし素朴な上代人は、かうした自力他力の如何を問はず、動くものをすべて一種の生きて働くものと考へたのではなからうか。例へば荒れ狂ふ海や大風は、天然自然の現象に過ぎないが、上代人はこれを生きて働く有情と認め、そこに一種の人格的な力を感じる。

これと逆に、草木土石の如く全然静止して動かないものは、生命のない非情と見られる。例へば万葉に「問言はぬ木」といふ表現があつて、草木の非情を示すまじり文句のやうに使用されてゐるが、「言問ひ」は言葉によつて問ひかけ呼びかける一つの表現行動であり、この行動性に欠けるといふことが草木の非情を示す證となるのである。かくて、人間・鳥・霞・雲・船等はすべて動くことのできる点で共通の性格をもち、その意味で等しく有情と考へられたといつてよい。人間や鳥に多く使用される「ゐる」「をり」が、何故雲・霞・船にも使用されたかは以上によつて理解されると思ふ。これらを非情と見るのは今日の生物学的なもの考へ方によるため、万葉人の意識からすれば、これらは人間や鳥と同様に生きて働く有情であつた。

されば上代でも「ゐる」「をり」は有情に対して使用される表現だといつてよいが、その有情は上代的意味におけるものであることに注意しなければならない。

以上の如く「ゐる」「をり」の主体は行動することのできるもの、或は働くことの可能なものであるが、かうした有情が静止定着の働きを表はす時、これを「ゐる」「をり」といふわけである。凡そ行動或は働きの内容は多様であつて、去來し移動することも働きの一つであれば、逆に静止定着することもその一つである。しかし先にも指摘したやうに、「ゐる」「をり」は動きつつある状態そのものではなく、逆に主体が動きを中断し静止定着してゐる状態をさすのである。例へば飛び廻る鳥や流れ去る雲を「ゐる」「をり」とはいはないのであつて、これらが一定の場所に止まりそこに定着する時、始めて「ゐる」「をり」と認められる。

この場合、静止定着といふことには存続持続の意味があると思はれる。例へば鳥や雲は常ならば去來し移動して定着するといふことはないが、さうした動きつつあるものは現はれて直ちに消え去るもので、それは一時的瞬間的に存在するに過ぎない。然るにこれらが動きを止めて人々の意識内に定着する時、人々はそこに存在しつづけるものを體驗する。かうした存続持続の意味をもつ存在のし方が「ゐる」

る」「をり」の意味内容であつて、去來する雲や鳥の如く一時的にしか存在しないものは、「ゐる」「をり」とはいれない。つまり静止定着とは、一定の場所に存続する意味である。ところで先に指摘した通り、「ゐる」「をり」は他の動詞に接続して動作の存在継続を示すこともあるが、これは「ゐる」「をり」が本來有する存続持続の意味の分化発展したものではなからうか。例へば「水に浮きわた」とか「人を待ちをり」とかいへば、単に「浮く」「待つ」といふよりも、その動作を持続的に體驗する意味がある。かうした持続存続の意味は、「ゐる」「をり」自体に内在するといつてよからう。

以上の如く、「ゐる」「をり」は或対象が一定の場所に静止し存続する意味であるが、しかし静止存続といつても、それは草木土石のやうに全く靜的に存在する意味ではない。これらは働くことのできない非情で、単に物としてそこに横はつてゐるに過ぎない。かうした存在のし方は「あり」と表現される。然るに、「女がゐる」「鳥がをり」といふ場合、その女や鳥は生きて働くものであり、「ゐる」「をり」は生ける主体の示す一つの行為といつてよい。行為或は働きにはいろいろな内容があるわけで、動き廻ることも行為の一つであれば、逆に静止することも働きの一つなのである。だから「草木あり」「土石あり」の場合と、

「女がゐる」「鳥がをり」の場合とでは異なるものがある。前者は対象が単なる物として横はつてをるに過ぎないが、後者は対象が生きて働くものとして存在する意味がある。換言すれば、「土石あり」の場合人は土石を唯の物として眺めるに過ぎないが、「鳥がゐる」「人をり」といふ時、人はそこに自己と対立し共生する行為的存在を認めて心的緊張を体験する。つまり「あり」がものの存在を意味するに對し、「ゐる」「をり」は行為的社会的な存在のし方を表はすと考へられる。

六

同じく存在の表現といつても、以上の如く「あり」といふ場合と「ゐる」「をり」と表現する場合との二つがあるのであつて、例へば人間でも「ゐる」「をり」といふ他に、「あり」ともいへる。「我は妻あり」「歎く人あり」「光源氏といふ者あり」のやうな言ひ方は、今日でも行はれてゐるところである。万葉にも「海の浜辺にうらもなくいねたる人は若草の妻かありけむ」（三三三六）「い渡らす子は若草の夫かあるらむ」（一七四二）と見えてゐるが、これは今日の「私は妻がある」と同じ言ひ方である。ところで「私は妻がある」といふ場合と、「妻がゐる」

「妻がをる」といふ時とは意味の差があると思はれる。つまり後者においては、妻は現実の場にあつて自己に對立し自分と共存するところの生きて働くものといふ意味がある。即ち「ゐる」「をり」は妻の表はす行為であり、妻はさうした行為をもつて自己に働きかけるものとして存在する。然るに「私は妻がある」といふ時の妻は、そのやうな行為的存在としてあるのではなく、一つのものとして捉へられてゐると思ふ。現実生きて働く人ではなくて、妻といふものであり人事である。だから「我は妻あり」は妻といふものがあるといつたほどの意味であらう。

「あり」は事物の存在を意味すると共に又人間の存在をも表はすといはれるが、人間の存在といつても「ゐる」「をり」の場合とは意味の相違があり、両者は使ひ分けられてをるやうに見える。例へば記紀歌謡に「遠々し高志の国に賢し女を有りと聞かして」（記上巻）「春日の国に麗し女を有りと聞きて」（紀継体巻）とあり、又万葉にも「あまをとめ有りと聞けど」（九三五）「我が念ふ妹もありといはばこそ国にも家にも行かめ」（三二六三）と見えてゐる。これらはすべて現実の場を離れた他界に人の存在することをいつたものであるが、この他界は又現在から隔つた過去として表象されることもあり、「古にありけむ人」（一一一八）のやうにいはれる場合もある。かく古に

おける人の存在を「あり」といふ例は平安朝の物語に多く、伊勢物語はその冒頭に「昔男ありけり」と記し、竹取物語も、「今は昔、竹取の翁といふものありけり」で書き初めてゐるが、今昔も大体同一形式であり、源氏さへもその冒頭はほぼ同様であるといつてよい。以上の如く、他国や過去における人の存在を「あり」といふ例は古典に多いわけであるが、この場合何故に「ゐる」「をり」を用ひないですべて「あり」といつたのであらうか。思ふに他国や過去は現実を離れた他界であり、直接に体験される世界ではない。だからそこにおける人の存在は「有りと聞く」「有りといふ」「有りけむ」「といふ者」などといふやうに、すべて伝聞されたものである。従つてその場合の人は、これを語る者から見れば現実に働く人間ではなく、遠い世界に横はる一つのものとして意識されたのであらう。「ゐる」「をり」がどこまでも現実に働くものの存在を意味するに對し、「あり」はさうした働きをもたぬ事物の存在を意味するが、遠い他界における人は現実の世界から離れたもので、現実への働きかけが少い点において事物と同じく静的な存在と考へられたのであらう。

「あり」についてはなほ多くの実例を検討してその意義用法を明らかにしなければならぬが、ここでは「あり」のもつ一面をあげてそこから「ゐる」「をり」の特性を指

摘したわけである。山田博士の研究によると、「あり」はものの存在を示す他に、性質、状態、動作の存在を意味するし、さらに陳述の作用を表はすなどその用法は多岐である。^(註三)これに反し、「ゐる」「をり」はどこまでも働きをもつた有情にのみ使用され、その存在（動作の存在継続をも含む）を意味するやうに限定されてゐる。

註一 古事記伝

註二 万葉集講義卷三

註三 日本文法学概論或は奈良朝文法史の「存在詞」の項参照